

## ポーランドとロシアの社会主義の 相互関係（2）

ローザ・ルクセンブルク

佐保雅子 訳

### Ⅱ

ポーランドにおける社会民族主義的潮流の歴史は——逆の立場からではあるが——〈プロレタリアート〉党の歴史と同じように、ポーランド社会主義運動の綱領の性格とロシアの運動にたいする関係のなかにある直接的な結びつきを雄弁に物語っている。

社会主義によるポーランドの再建という古びたスローガンを賦活しようとするさまざまな試みは、たしかに、ポーランドにおける社会主義運動と殆んど同じほど昔から存在した。すでに1881年に、社会民族主義グループ〈ポーランド人民〉の結成に関する声明が出された。このグループは、ヴァリンスキの批判によって、たちまち葬り去られたし、また、このグループによる日常実践活動も、クールにおける社会主義者の国際会議で、リマノフスキ博士とかいう人物が自ら代表者となってポーランド労働運動を貶しめた不手際な試みによって制約された。<sup>34)</sup>

このような試みの第二は、1887年に当のリマノフスキ博士が旗頭であったパリのポーランド愛国主義学生グループによってなされた。<sup>35)</sup>しかし、このときも社会民族主義者たちはポーランド労働運動から完全に退けられ、社会主義者たちから苛酷な嘲笑を浴びながらも、精彩を欠く月刊誌『めざめ』を2年間刊行したのち、承継者をもたずにひっそりと消滅した。<sup>36)</sup>

第三の試みは、1893年に突如として民族主義に転向した国外の『プシェドシフィット』発行者たちがつくった今日の〈ポーランド社会党〉によっ

てなされた。このもっとも新しい社会民族主義の出版物と、その先行者たちとの相違は、ここで、はじめて西欧社会民主主義の精神に則った階級的基盤の上に民族主義の基盤を確立する試みがなされた点にある。以前の民族主義者たちは、徹頭徹尾“各民族の独立権”に依拠していた。しかも、彼らはリマノフスキ氏の古典的な図式によって自己の政治綱領と社会主義の統一を説明した。彼によれば、祖国の独立はうたがいもなくきわめて素晴らしい理念であり、社会主義も、それ自体、少なからず素晴らしい理念を提示するものである。それゆえ、かくも素晴らしいふたつの理念をひとつにまとめる土台がない筈はない、というのである。

ポーランド社会主義運動が15年間を経過したのち、すなわち〈プロレタリアート〉党によって社会民族主義が決定的に清算されたのちの1893年には、彼のかくもお人好しの旧態依然たる理論的根拠づけは、すくなくともその形態上は、より時宜にかなったもの、すなわち、プロレタリアートの階級的利益による根拠づけにその地位をゆずらねばならなかった。まさにこのとき、社会民族主義は、はじめて、すべての内部矛盾、とりわけロシアにおける革命運動の利益との矛盾を顕在化させ得たのである。社会民族主義の誕生が、当初、いかに素朴なものであったにせよ、その志向が個々の民族の自由という抽象的な権利にのみ依拠していた間は、それは、ロシアの人民自体と、まして、ロシアの革命家たちと敵対関係にたつ何らの理由（必要性）をももたなかった。それどころか、かつてのポーランドの愛国者たちとロシアのデカブリストとの間の誠意ある信頼関係の存在は周知のことである。最近の社会民族主義は、労働者階級の利益とポーランドの再建との関連性を探って、その綱領上——ロシアにおける革命的勢力の欠如という——根本的見解を確立するまでに到った。

1894年の公式機関誌『ポーランド社会主義党』によれば——綱領的な主張「ツァーリズムと労働者」が述べているのであるが——その根拠づけは以下のようなものである。「自由獲得のために、ロシアの専制支配を打倒しなければならぬし、これにたいする公然たる闘いをはじめなければな

らない。しかし、この闘いが我々に真の利益をもたらすためには、我々はどのような自由が獲得されるべきかを知らねばならない。すなわち、ロシアから分離せずに我々とロシア人との共通の憲法をのぞんでいるのか、あるいは、ロシアから分離して自由独立のポーランドの確立をのぞんでいるのか、ということである。

我々がもしも自由のための闘いをロシアと共通の憲法の要求にのみ限定するならば、その場合には、我々は我が民族のロシアへの従属という従前通りの災いの状況にとどまることになるだろう。我々は、ある地域を征服した政府が、当該地域の民族を根絶やしにしようとしていることを知っている。しかも、民族の迫害は、優越的資本家階級の支配の軛から労働人民を最終的に解放する契機を著しく遠ざける現象を伴うのが常である<sup>37)</sup>。この命題を論証すべく、著者はつづいて次のように論じている。

「のみならず、ロシアは我々にとって他国の政府であるばかりでなく、文化的にも経済的発展においても我々よりもはるかに劣る民族の政府なのである。ロシアにたいする多年にわたるタタールの支配は、ロシア人民の慣習にその痕跡をのこした。それは彼らを隷属状態にいることや権力にたいしておだやかな尊敬を払うことに慣れさせ、あらゆる啓蒙を遅らせた。タタールの羈絆を一掃しロシア全土をひとつの国家に統一することは、ツァーリの権力を確立し、人民の眼前でその魅力を増さしめた。その結果、人民は何等異をとなくツァーリの軛の下で背中の重荷に従順に耐えている。長年月にわたる広範な人民大衆の政治生活からの完全な排除および啓蒙の欠如——ロシアの人民大衆が政治的問題に無関心なのは、ここにその原因がある。

ロシアにおけるこうした状況の存続に力をかしているのは、その経済的後進性である。すなわち、農村には土地の共同所有にもとづくオプシチナが存在する。このような昔ながらの制度は、ある程度まで、ロシアの農民を極端な貧窮から予防している。けれどもそれは彼らを土地に縛りつけ、農村の外でおこっているすべてのことに対する無関心を招来している。ロ

シアの農民の生活はオプシチナの事柄にのみ限定され、したがって彼らは何等の政治的意欲ももたず、極度の政治的抑圧を継続させる状況にとどまっている。ロシアにおいて主要な政治勢力を形成しなければならない労働者階級は、まだ自己の権利意識がはなはだ低い段階にあり、しかもきわめて少数である。さまざまな産業部門における労働者数はようやく200万人に達したばかりで、1億の人口にたいしては、とるにたらない勢力にとどまっている。そのうえ彼らは広大な地域に分散していて、それが、ロシアの労働者の結集、単一の目的乃至志向をもったひとつの党への統一を非常に困難にしている。

その他のロシア人民は、商人、工場主、官吏、将校、貴族であり、少数のインテリゲンチアを除いて、すべての者はツァーリを崇拜し彼とともに世界を侵略し全ヨーロッパをロシア化して支配下におくことを夢想している<sup>38)</sup>」。

ロシアの社会的諸関係についての、このような暗い描写のあとに、ポーランドの状況の描写が生き生きと明るくつつづけられる。古い小貴族国ポーランドにおいてさえ、自由は、ロシアにおけるよりもはるかに大きかった。

「のみならず、我国の経済状況は、はなはだしく発展の度を加え、西欧のそれに酷似している。資本主義の高度な発達是我が国に強力な労働者階級を創り出した。彼等は都市および工場区域に集中している。我が国におけるある都市の労働者は、およそのところ、一千万人につき百万人である。彼等の教育程度は比較的高い<sup>39)</sup>」等である。これらすべてのことから次の結論が出される。「一言で言えば、歴史的条件とならんで、文化的・経済的発展度も、ロシアの憲法にくらべて独立ポーランドの憲法が比較にならないほど民主的になる、という意味で効果的に作用するのである。ポーランドにおける労働者大衆のより高度な教育とより広範な政治活動を考慮に入れれば、憲法は彼等により多くの政治的権利と自由を承認しなければならないであろう。我が国において、すぐれて階級的な政治勢力を形成しているポーランド労働者の発言は、憲法施行後のロシアにおいて

よりも、独立ポーランドにおいて、より大きな影響力をもつであろう。

そして著者たちは次のように結論づける。「かくして、我々の利益のために、現在の政治的隷属状態の鎖を断ち切って自由独立のポーランドをうちたてなければならない。なぜなら、そこでのみ我々は獲得された自由から真実の利益を享け得るからである」<sup>40)</sup>。

このように長い抜萃を意図的に試みたのは次の理由による。すなわち、ここに引用したロシアの社会状況にかんする見解がすべての綱領の枠組みの基礎となっているからであり、かつ、タタールの羈絆の宿命的な結末や独立ポーランドについて我々に期待を抱かせる魅力を主題とする変奏曲がその志向をもつ多くの論文やパンフレットで繰返されているからである。

かくて、労働者階級によるポーランド再建の必要性は、周知の思惑によって、主として、再建された独立ポーランドの政治機構が、ロシアにおいて専制の崩壊ののちに導入されるであろう憲法よりもいっそうすぐれて民主的なものであるにちがいない、という前提からひき出されている。換言すれば、すべての綱領は、実質的には、二つの未だ存在しない憲法の比較の上に組立てられており、さらに加えて、そのうちのひとつは未だ存在していない国家の憲法である、という特殊性を有している。

我々が、ここでは純然たるユートピアが取扱われていることを理解するためには、この特殊性を一瞥するだけで十分である。たしかに、ユートピアにもいろいろなものがある。かりに、たとえばシャルル・フーリエのユートピアに独創の名を冠するとしても、わが社会民族主義者たちのユートピアは、いずれにせよ、陳腐なものに範疇に入る。けだし、当時のフーリエ派は、ブルジョア的機構の欠点を摘示しているのにたいして、『プシェドシフィット』からうかがうことのできるユートピアは、筆者たち自身の真面目さの欠如以外の何もかも示してはいないからである。事実、社会主義者の政治綱領にポーランドの再建を採り入れる必要性は、ここでは、結局、以下のように独特な方程式の解答として提示されている。再建ポーランドの民主主義は将来立憲化されるロシアにおける民主主義と次のような

比例関係にある。すなわち、ポーランド1000万住民の中の100万人の労働者に対するにロシアの1億にのぼる住民のうちの200万労働者として、あるいは、単純にも、このおどろくべき政治算術をさらに簡略化して、 $1/10$ に対するに $2/100$ という比例関係にある、と言うのである。

こうして、ポーランドが再建されるならば、その独立ポーランドにおける民主主義は、専制の崩壊ののちに立憲化されるロシアのそれよりも、ちょうど五倍の大きさになることが疑いの余地なく証明されたことになり、したがって、ポーランドの再建がポーランド労働者階級の緊急かつ焦眉の課題であることをいささかでも疑い得る者は、まさに、心底からのロシアの回し者だけだ、ということになるわけである。

古い民族主義的スローガンを社会主義的階級の見解によって基礎づけようとするこのような試みが、科学的社会主義の方法論とも史的唯物論の観点とも無縁であることは指摘するまでもないであろうし、また、ここでいうポーランドプロレタリアートの“階級的利益”が、社会発展の具体的な経過からではなく、抽象的な、もしくは、より正確には非現実的な思考からひき出されていることも言うまでもなからう。もっとも、政治綱領の名宛人になっているプロレタリアートのために最良の“民主的憲法”を前もって保障し得るような新しい国家機構の創設についての子供っぽい思惑を、かりに“思考”と名付け得るとすれば、であるが。

このようなやり方で、“プロレタリアートの利益のために”まず、たとえば、ハンブルグ市を独立共和国としてドイツから分離する必要性を抽出し得ることが、明らかである。というのは、ドイツ帝国議会における投票の結果からみて、この共和国では、民主主義は、ドイツの帰属下にある現在のハンブルグよりも、はるかにすすんだものとなるであろうし、それに、ハンブルグの独立は古来からの“歴史的な権利”としてさえ根拠づけられるのだから、である。同じ論法で、“労働者階級の利益のために”，凋落したオーストリアから生産力の高いボヘミアを独立国として分離する必要性を証明することも可能であろう。というのは、この場合でも、憲法

は、ハプスブルグ王国におけるよりも、計算上、たしかにより民主的になるだろうから、である。

このように精緻な綱領の“根拠づけ”が、どんなに御立派なものであるかを評価する（白日の下にさらす）ためには、科学的社会主義の大太刀を振わずとも、それが、統計上の虚構と、比較におけるもっとも初歩的な歪曲に立脚している事実を簡単に指摘するだけで十分であろう。

将来のポーランドにおける“民主政体”の主要な担い手となっている“100万”のポーランド労働者は、統計上は、“未来の夢”，しかも、はるかに遠い未来の夢にほかならぬことが、まず指摘される。ロシアの工場にかんする公式報告書によれば、90年代の初頭におけるポーランドの工場労働者の数は、鉱山労働者とあわせて、約15万5千人である。もちろん、公式報告書は、常に、きわめて不正確で、しかも、就業労働者の数を実際よりも著しく低く見積る傾向を有しているものであるが、いずれせよ、お役所の計算のおぼつかなさは、ポーランドについても、大ロシアについても、まったく公平に及んでいるのである。というのは、帝国のさまざまな地方の相応な資料のおぼつかなさと比較してみると、それは特に考慮に入れなくてもよいからである。

つまり、すべての卑劣な行為をどんなにロシア政府のせいにしたくても、ポーランドの社会主義者を悩ませるためというただそれだけの狡猾さによって、公式統計で、ポーランドの労働者だけを80万人ほどごまかして隠した、とは考え難いのである。

また手工業労働者を考えに入れても——もっとも“200万”ロシア労働者には、おそらくこれが算入されていないだろうが——ポーランドの工業労働者は決して“100万”ではなく、たかだか37万人ていどである。

しかもそのうえ、立憲化されたロシアに比較して、将来のポーランドにおける民主主義の優越性を示すはずの見かけだおしの比率は、ロシア領ポーランド、すなわち、産業面で発展しているポーランドの特定の地域にかかわる数字にのみ基づいているのである。ところが、予定されている独立

ポーランドは、社会民族主義者たちの計画によれば、分割以前の三つの部分、すなわち、ロシア領、オーストリア領およびプロシア領ポーランドの全土のみならず、古いポーランド＝リトアニア王国の領域にいずれの時代にせよ帰属していた全領土、つまり、ポメラニア、シュレジア、リトアニア、小ロシアおよび黒海に面する南ヨーロッパ——もっともバルト海沿岸地域の運命については、いまのところ、事情は明らかではないらしいが——の全土をも含まねばならない、というのである。この点について『ブシェドシフィット』の発行者たちは、最近になって(ミュンヘン党大会におけるポーランド問題にかんするカウツキーの論文について、彼を名宛人とするきわめて悪意にみちた主張のなかで)、彼等が、領土問題について少しも真面目に考えてはいないこと、および、古いポーランド領のどんな小さな領地も譲りわたす意思をもたないことを世界に知らせめた<sup>41)</sup>。しかし、かりに、資本主義的關係からみてその大部分が後進的であり、かつ、圧倒的に農業および小手工業地帯であるこのような地域をひとつにまとめたならば、将来のポーランドの夢はあとかたもなく消え失せ、そして、おそらく全人口に占める工業労働者の比率はロシアのそれをはるかに下まわるであろう。

かくて、ある国の民主主義を、フランネルをアルシんで計るように、そこにおける工業労働者の数で簡単に計測するという書生風の観点を採用したとしても、古い統計資料と今日のそれとの交換だけで事足りりとするようなことでは、社会民族主義的綱領のどんな“根拠づけ”からも何ものも生れはしないのである。

けれども“より民主主義的な憲法”についての非現実的な思弁は無意味な片言——労働者のためにナショナリズムの“階級的”基礎づけにとってかわらねばならぬものとされ、しかも、そこに含まれている初歩的な誤りについての重要な指摘に目もくれないものなのだが——にすぎないが(そして、[だからこそ)、そのような綱領の根拠づけの、事実上明白な核心は、すでにみたような、ロシアとその社会關係についての見解なのであ



る。

子供っぽい思いつきを大仰な表現で語ろうとする一方で、社会民族主義者たちは、ロシアについての見解で、ナロードニキ理論とマルクス主義理論とを独特な形で結びつけている、とも言い得よう。まさに、この意味において、彼らは、ナロードニキとともにロシアにおける労働者階級の政治的意義および勢力を否定し、マルクス主義者とともに、ロシア農民の革命的意義を否定し、ナロードニキにしたがって、ロシアをオプシチナの土地所有制という襁褓に拘束された社会的に不変なもののみなし、しかも、マルクス主義者にもしたがって、このオプシチナの土地所有性を単なる社会的障害物、政治的抑圧の土台ともみなしている。

一言で言えば、彼らはロシアにおける発展と革命の契機の否定という一点において、このふたつの相反する世界観を結びつけているのである。

ロシアにたいするこのような見解は、社会民族主義の基盤の本質をあますところなく示すものでもある。実際に、煽動に際して、社会民族主義は、ロシアを暗鬱に、そして、将来のポーランド国家を希望にみちた調子で、きわめて粗雑に描き出さざるを得なかったのである。このような純然たる民族主義的デマゴギーの典型は、すでに1893年に社会民族主義者がメーデーにむけて出版した最初のパンフレット<sup>42)</sup>にみられる。「独立ポーランド」という章において、労働者の政治的要求は次のように述べられている。

「労働者にとって何よりも必要とされるのは何か？

自由である。なぜなら自由な労働者だけが搾取を一掃することができるからである。

しかし、我々の自由はモスクワ野郎とは相容れない。ツァーリ体制の下では、我々はいまだかつて自由を知らないのだ。というのは、自由と正教徒たるツァーリとは、火と水、光と暗のように相容れないものだからである。

自由を得るためには、ツァーリを追い出し、自分の家を清掃し、国家を

モスクワ野郎から解放しなければならない。

自由をかちとり赤貧を根絶するためには、独立ポーランド、我々のためだけのポーランドが必要なのだ。

我々が、100年にわたる隷属を経て、独立ポーランドを自らとりしきることをはじめ、自由な休息をとるとき、ようやく、飢餓、窮乏、苦痛、屈辱が終りを告げるであろう。

そのとき、我々はすぐに我々を搾取している工場主や全地主を片付けるのだ。そして、背後から憲兵に脅かされず、自由な人民になって、我々は、収奪や搾取や追いはぎを誰にも許さないのだ。

自由のあとには、常に、幸福がつづく、幸福のあとには文明がつづく。同様に、モスクワのツアーリのあとには、常に、いたるところに、隷属、赤貧、無知蒙昧がつづく。

日の出とともに暗闇と悪夢が消える。自由の光が我が国土を照らして最後のモスクワ野郎がポーランドから逃げ出すとき、赤貧や窮乏が消える<sup>43)</sup>」。

上述の長広舌は、メーデーに際しての次のような各種出版物に形をかえて繰返されているほど時流にかなっていたのである。すなわち、1897年に〈ポーランド社会党〉メーデーパンフレットは、ここに引用した文章をほぼそのまま繰返している。ただし、最後の行にある「モスクワ野郎がポーランドから逃げ出す」のうち「モスクワ野郎」という言葉だけは削除されている。というのは、このような排外主義的攻撃は、社会民主主義の支持者の間においてさえ困惑を呼びおこしたからである。<sup>44)</sup>

かくして、すべての社会主義的煽動は民族主義のありふれた道具に変えられてしまった。つまり、ロシアの政治機構の全現象は、専制の結果としてではなく、外からの支配の結果として解釈されたのである。1896年に〈ポーランド社会党〉が発行した「社会主義者は何を望むか」というパンフレットではつぎのように述べられている。「我々がツアーリ政府の恩恵に与っているという事情が、ポーランド人民にどのように影響しているか

を検討しよう」。

「ツァーリ政府は、我々を、税制上虐待している。我々は、祖先の土地に住み、庇護され、生きていることにたいして税金を納めなければならない。我々はモスクワ（ロシア）農民より三倍も重い税金を納めている。政府は、毎年、ポーランド人民から何百万ルーブリもまきあげる。ときには最後の一グローシュまでも奪いとる。しかも、この金だけでは足りず、政府は、すべての物に物品税を賦課し、物価騰貴をひきおこしている。我々から集めた金はどこへ行くのか知っているか？それは、軍人、憲兵、警官、僧侶の扶養と、わが国におけるギリシャ正教の教会の建造のために費われている。こうして、我々からあつめた金は我々自身を抑圧するために費われているのだ。我々は、自分たちに服従を強いる警官、憲兵、警察署長を支えるために支払っているのだ。我々は我が国でギリシャ正教をひろめるために支払っているのだ<sup>45)</sup>」。

かくして、専制の圧迫は、ロシア人民とのかかわりでは——経済的關係においてさえ——ポーランド人民にとってのそれよりも、故意にはるかに軽度なものとして、取り扱われている。

通常の税金は、あたかもポーランド住民にたいする特別な処置であるかの如くとらえられている。税制上の搾取も、軍国主義や階級支配の組織化のために国民の財産を充てることも、ロシアという“外国の”政府に固有な性格ではなくて、ブルジョア機構の支配下にあるすべての民族的政府の属性であることについて、パンフレットの著者たちは、ほんの少しも理解していない。逆に、ポーランド独立国家は、地上の天国として、“人民共和国”として描かれているのである。「人民のポーランド王国、ここでは我我ポーランド人民が支配者なのである。人民は、自らを統治するであろう。いかなる圧迫者も、いかなる権力も存在しない。すべてのことについて考慮がゆきとどき、我々がきめたこと、それが法律となるであろう。官吏は、もっとも上級者からもっとも下級の者まで、我々が自ら選び、このようにして選ばれた官吏は、我々にたいして責任を負う。不適當な行為が

あれば、即座に、彼はその地位を逐われるであろう。全く同様に、裁判官や教師も我々が任命する。——かくして共和国においては、政府は我々すべての人民によって選ばれ、すべての法律は人民によって承認されねばならないものとなる。共和国では、人民が税金を定め、この税金が何につかわれるべきかを定める。銀行、抵当権者、高利貸にたいする債務はすべて破棄される。<sup>46)</sup>」等々。実際に、このようなポーランドの奇蹟によって、ただポーランドだけがこれまで地上に例をみない幸福な国に変化する。そこでは、ポーランドの資本主義も支配階級もなくなってしまう。もちろん、社会民族主義者たちは、このことについては、説明しようとしな。同様に、彼らは、今日存在するすべての独立共和国、すなわち、フランス、スイス、アメリカ合衆国が、ポーランド共和国について彼らが描いたかがやかしい図とは似ても似つかないという事実にも極力ふれようとはしない。そもそも、ロシアの支配はポーランドにおける階級支配の原因となっており、しかも、ポーランドに住む者にとりついているすべての災いにも決定的な責任を負うものである、という結論がひき出されるのである。こうした考え方にたって、社会民族主義者たちは、彼らの意見によれば、ポーランドで時折発生するコレラでさえ“ロシアの”発明品以外の何ものでもないことを証明するという、たわ言を口にするまでに到っている。1894年6月の『プシェドシフィット』には、次のような意見が載っている。「コレラは、女工の衛生検査についての指令やスト参加者を傷つけるコサック等と同様に、ロシアの支配の産物そのものである。我々は、昔は、《飢餓、死、戦争から》逃がれたるために祈るだけだったけれども、現在では、この問題は簡単なことになった。というのは、あらゆる災厄から逃がれたいと望むならば、我々は、ロシア政府を追い出さねばならないからである<sup>47)</sup>。『プシェドシフィット』は、コレラについて責任を負うべきなのは、専制政府ではなくて、まさに、ロシアの支配そのものであると強調している。すなわち、それは次のように述べている。「このような関係が、ロシアにおける政府機構の変化と絶対主義の倒壊によって、よい方向にかわる

かもしれないということは、考えないでおこう。ポーランド地方は自治権を享受していても——ロシアの自由主義者たちは、自治という観念を決して思いつきもしないだろうが——財政政策の面では、常に、国家全体に従属してきた。そして、ポーランドプロレタリアートから出されるもっとも強力な改革要求は、ロシアの反動的多数派の無関心によって、常に、挫折してきた<sup>56)</sup>。かくして、コレラは、ポーランドにとって、どんな統治形態の下でも、文字通り、ロシアの支配につきものとなるのである。そうして、この本来ロシアの“産物”であるコレラが、かつて、ロシアの支配下になかったハンブルグで何故あのような荒廃をもたらし得たのか、ということとは謎のままに残ることになる。これまでみてきた社会民族主義的煽動の見本は、70年代の頭初からこのような傾向が如何なる形態をとってきたか、ということを示している。これは偶然的または一時的な現象ではないことを極く最近の出版物が証明している。農民を対象としたポーランド社会党の新しい機関紙『人民新聞』の1902年第1号において、同党は、次のように宣言している。

「農民、土地を耕やす兄弟たちよ、我々がいま発刊しようとしている新聞は君達の新聞である。その課題は、農村の百姓たち、自分の土地で働く自作農たち、地主の土地で働く労働者たちの要求と利益に奉仕することである。

ワルシャワで発行されるこの新聞で、多くの有益な事柄を知ることができよう。しかし、わがポーランドの農民にとってもっとも重要な出来事を書くことは許されていない。モスクワの検閲機関は、我々が誰よりも抑圧されているという真実について書くことを禁じている。我々人民は隷属状態にある。モスクワ野郎は、我々の母国語や信仰を抑圧している。ツァーリの役人どもは、我々から物を掠めとり、常に強権的支配下においている。モスクワ政府が公布する諸法律は忌むしく不当なものである。しかも、この法律を、政府は守ろうとさえしないのである。——税金は他に類をみないほど苛酷である。——我々ポーランド人は、モスクワ野郎よりも

三倍も余計に支払わされている（！）。しかも、ポーランド人民のうちで最も多く税金を支払わされているのは農民である。地主の所有地で得られる賃金は、家族とともに何とか生きてゆくことができる額よりも、はるかに低い。モスクワのツァーリは、ポーランド人民から毎年7千万ルーブリの税金を搾りとっている。しかも、これらのすべては、役人ども——モスクワ野郎を養うためにだけ支出されているのであって、我々の労働によって何千人もが儲けているのだ<sup>49)</sup>」等々。

かくて、ポーランドにおける悪（災わい）の根源は、やはり、ブルジョア機構や専制ではなくて、ロシアの支配だ、というわけなのである。

社会民族主義者の主張によれば、もしも、“モスクワの検閲機関”がなかったならば、ワルシャワのブルジョア的かつプチブル的新聞——ちなみに、これは、世の中でもっとも厭わしくて反動的なものなのであるが——には、ポーランド農民の状況についての“真実”がみちあふれることになる。彼らは、ロシア農民の未納税者を、その役人ども——モスクワ野郎が笞打ちでこらしめる、という事実には極力口をつぐみ、そのかわりに社会民族主義者の極秘かつ非合法的統計資料にもとづく計算によって、ポーランド人は“モスクワ野郎”よりも“ちょうど三倍も”納税している、というのである。それゆえ、ポーランド自体はあらゆる至福にみちているかの如き楽園なのであり、ロシア国家から、これを解放しさえすればよい、というわけである。編集部の署名がある、この包括的な綱領にかんする論文は、つぎのように結論づけている。「今日、我々は、いかにして祖国を隷従から解放し、ポーランドの土地から不幸と不正を追放すべきかということ、我が農民の知恵によって検討し考察するのである。話し合いをつづけて、自らの手で祖国に自由をとり戻し、祖国が、その息子、働く人民たちにとって継母ではなくほんとうの母になるような秩序をつくり出そう。我々には、統一、和合、啓蒙のみが必要なのである。どんな力も我々をさえぎらない。我々は、やがて、自由な故国、自由なわが祖国、愛するポーランドで自由になるだろう。そうなれば、地主も賤民も、階級もなく

なるだろう。そこにいるのは、わが祖国ポーランドの真の息子たち、ポーランド人のみであろう<sup>50)</sup>」。

社会主義の痕跡をひとかけらもとどめていないこのような排外主義的デマゴギーが、9年間にわたって存続した社会民族主義の最後の言葉なのである。もっとも、プロレタリアートの観点からするポーランドの再建という綱領について“純然たる階級的”基礎づけを主張しなかったこのような傾向の先行者たちの名誉のために、そして、80年代初頭の学生の〈ポーランド人民〉グループや80年代のおわりの『めざめ』グループの名誉のために、つぎのことを言っておかねばならない。すなわち、彼らは、一度たりとも、民族主義的感情を煽りたてるために社会的諸関係についてこのようなデマゴギーに充ちた歪曲された描写をしたり、社会主義の基本的観点を放棄したりはしなかった、ということである。30年代のポーランド民主主義者や民族主義者の文献に親しんだ人は、誰でも、社会主義の立場を採らないポーランド小貴族の理論家たちが、たとえば、1894年12月付〈ポーランド社会党〉の機関紙『プシェドシフィット』に掲載されているロシア人民の性格規定にみられる排外主義的結論づけのような、過誤を犯さなかったことを知っている。「過去のロシアの歴史的諸条件および現在の内部的諸条件は、社会諸階級すべてに明白な刻印を遺している。幻想にとらわれないようにしよう。／隷属の世紀は罰をうけずに過ぎ去りはしない。／ロシア人の性格は、隷属によって賤しくなっており、社会的野性化のあらゆる特質を内包している。際限のない受動性、権力と富にたいする宗教的拝脆、勢力をもつ者にたいする従順さ、貧しい者にたいする厚かましき、無慈悲さ、狡猾さ、偽善、うわべの親切さにかくれた偽瞞、小売やペテンについてのねっからの東洋的才覚、宗教上の狂信性、ひからびて鈍重で宗教心のない性格、たぐいまれな性的放縦および放埒、これらが、その性格の典型的特質なのである。政府と僧侶によって一貫して維持されている無教育、驚くべき大酒のみ、貧窮、共同の要求の完全な欠如、および、最終的にはすべての衝動や努力を萎えさせる宿命論なども付け加えられよう。それに

比べて、我々には、ある《予言者》の意見によれば、《腐朽したヨーロッパ》を情熱と勇気によって蘇生させるはずの《若い》民族の申し分ない性格がそなわっているのである<sup>51)</sup>」。

このような粗雑な排外主義の披瀝に類するものとして、すぐにも、ポーランド民族“について”はカトコフの<sup>52)</sup>、ユダヤ人についてはクルシェヴァ<sup>53)</sup>ンの長談義をあげることができよう。

実際に、社会民族主義は、そもそもの出発点から革命的社会主義の精神と相容れないものであることを本能的に感じているために、この立場にたつ煽動がポーランドについての賞讃とロシアについての嘲罵にみちているのだという事情は、識者にとっては十分すぎるほど明らかなことなのである。自分の“祖国”にたいする讚美と他国にたいする非難は、常に社会的傾向としての反動性の著しい徴候なのであって、またその逆のことも言い得る。

そのような例は、あらゆる国の社会思潮の歴史において、数多く見出すことができる。この点に関連して、ロシアでは、40年代と50年代に、スラヴ派と西欧派という両極に位置するふたつの流派が生じた。ドイツでは、20年代と30年代に、一方に自分の故郷を諷刺の筈で無慈悲にたたきのめした革命家ハイネやヴェルネ<sup>54)</sup>がいる。そして、他方には、ヘルマンの戦いや、<sup>55)</sup>ハイネが「そうだ、我々はぬかるみの中で勝ったのだ<sup>56)</sup>」と書いたトイトブルクの森<sup>57)</sup>における“栄光にみちた勝利”をはじめとして、歴史上、ドイツ“民族の誇り”を充たす乏しい口実を探そうとする“フランス風大食漢<sup>85)</sup>”メンツェル氏と反動家やロマン主義者の従者のすべてがいる。

現在でさえ、社会主義運動内部への反動的な一陣の風によって、民族問題においても、巾ひろく断固たるインタナショナリズムから排外主義的目論見への転換が、明確な形であらわれているのである。ドイツ社会民主党における南ドイツの日和見主義を見よ。それは、税金や植民地にかかわる実際上の政策においてのみならず他国の社会主義運動にたいする傲慢で無頓着な態度においても民族主義的立場に執着する、という際立った特徴を



もっているのである。<sup>59)</sup>

ロシア社会の硬直性とポーランド社会に内在する革命性によって全面的に基礎づけられたポーランド社会民族主義は、ポーランド労働運動にとっては、原則上も、政策的関係においても、最も重大な障碍にならないはずはなかった。

社会民族主義的宣伝が社会主義理論の普及をどれほど困難なものにしているかは、上述の例からも明らかであろう。社会生活の全現象、人民大衆の経済的困窮、軍国主義、通常税金等々がブルジョア機構や階級支配に根源をもつ現象としてではなく、民族的隷属の特殊な結果として説明されるとすれば、そのことが、大衆の間における社会主義的階級意識の形成を妨げることは明らかである。大衆の関心が、煽動によって、国家の従属という偶然的——社会的観点からみて——かつ外的な要因へと意図的にむけられているようなところでは、ブルジョア機構の土台や社会主義理論にたいする根本的理解をひろめることは、もちろん問題にもなり得ない。この意味において、ロシア領ポーランドの〈ポーランド社会党〉の活動は、社会主義の普及にとって明らかに障碍なのである。それは、ちょうど、近年、プロシア領ポーランドと高地シレジア<sup>60)</sup>において形成されつつあるポーランド民族主義のプチブル的傾向を帯びた活動と同じなのである。彼らは、ポーランド労働者の社会的地位の惨めさをすべて“ドイツ人”の支配に一貫して帰せしめているのである。これら二派の相違は、後者が論理的一貫性をより多く有しているという点にある。それは、はっきりと社会主義に敵対しており、その結果、労働者大衆に与える影響や彼らを脅かす危険性を予め最小限なものにとどめている。これにたいして、社会愛国者たちは、社会主義的言辞の陰で本質的には反社会主義的煽動を行い、ロシア領ポーランドの活動条件にとって有害な混乱や二倍もの危険をもたらしているのである。

しかも、社会愛国主義の直接的——政治的影響はなお有害であり、そして危険でもある。それは、今日、〈ポーランド社会党〉が、ポーランドに

おける専制との闘いにとって最も重大な障碍になっている，ということなのである。社会愛国主義は，表面的にはツァーリズムと絶えず闘っているように見える。しかし，実際には，ロシア政府とではなく国家と，専制とではなくロシアと闘っているのである。

このようなふたつの問題設定の主要な相違点は説明を要しないであろう。すなわち，統治の形態としてのロシア絶対主義にたいする闘いは，絶対主義の支配領域内におけるすべての革命的分子の政治的共同行動を一義的かつ完全に条件づける。つまり，それは，ポーランドとロシアの労働運動の革命的・政治的融合をも条件づけるのである。民族主義的観点では，このロシアの支配にたいする闘いこそ，逆に，ポーランド労働運動の政治的分離主義のあらわれとなるのである。

前者の場合には，ポーランド社会主義の政治的方向は，ロシアの運動から分離し，共通の民族的課題にもとづいてドイツやオーストリーにおけるポーランド人の労働運動と融合する方向をとることになる。

実際に，社会愛国主義者たちのあらゆる活動は，発生のはじめから今日にいたるまで，ポーランドとロシアの革命運動の融合（接近）を全力で妨げ，ポーランドの社会主義をロシアの革命的潮流の大勢から明確に切断，孤立させる方向をとってきた。

これは，何よりも，ポーランドの再建という綱領とロシアにおける絶対主義の打倒をめざす闘争綱領とを，互いに相容れない対立する志向として，完全にかつ意図的に対置させていることにあらわれている。一見したところ，ポーランドの民族主義的志向という観点においてさえ，専制の打倒をめざす闘いは，望ましいことであるばかりでなく不可欠な支柱であるように見える。そして，この意味で，ポーランドの民族主義者たちは，ロシアの革命運動にとってもっとも頼りになる同盟者であるように見える。このことは，我々が古き良き時代のまともなポーランド民族主義者を想起する限りにおいては，真実にも完全に合致している。しかし，社会民族主義者の下における民族主義綱領の独特な根拠づけをみるとき，事態は全く

異なる展開をみせる。

ポーランド社会民族主義が、発足時の、いわば基本的な観点として、ロシアにおける革命的分子の不在をうちだしたために、ロシアの社会生活上の事実や仕組みについて偏見にみちた解釈をせざるを得なくなったばかりでなく、ロシアの革命運動にたいしても、ことさらに不自然な態度をとらざるを得なくなったことは明らかである。

1894年の『プシェドシフィット』で、「諸段階」と題された一連の綱領にかんする巻頭論文のなかでは、つぎのように述べられている。

「なぜなら、憲法を獲得し得る力の存在を我々が信じていなかったら、どうして（ロシアにおける）憲法をめざす闘いの蓋然性（可能性）を綱領に掲げることができるであろうか？しかし、実際には、まさに、この点についての頼りなさが、現在の政治綱領の誕生のときから、いつも、我々の間では強力に主張されてきたのである。また、《可能な》憲法を支持する者が、どうして、自己の志向とロシア社会の反動性や社会主義的要素の弱体性の確信との折合いをつけることができるであろうか！このふたつの契機の結合が、ロシアにおける我々の憲法上の自由をとるに足りないものにするか、あるいは、全く無意味なものにすることを予め前提せざるを得ないときに、である。だが、実際は、著者たちは卒直に認めるのだが、我が同志たちのあいだでは、我々の論拠のうちのどのひとつも、このロシアの反動性ほどの一般性をもってはいないのである。」

「しかし、話をすすめて本題にもどり、ロシア憲法がすぐにも実現され、それが民主主義的なものであることを、我々が信じている、としばし考えてみよう。この場合に、はたして、我々はロシア憲法を政治要求として掲げるべきであろうか？

我々は、直ちに、否と答えることができる。政党は互いに相反するふたつの事柄を一度に要求することはできないのである<sup>61)</sup>」。

社会民族主義者は、その志向において、ポーランドの民族運動とロシアの革命運動との間に障壁を設け、両者を何とかして分断しようとするだけ

では足りず、ロシアの絶対主義の打倒がポーランドにとって害をもたらすものでしかない、とまで極言する。前述の『プシェドシフィット』の論文には、つぎのように述べられている。「この点にかんしては、憲法が実現したのちに、ロシアで極めて大きな変動が生ずることは疑いを容れない、と言える。しかし、この変動は、我々にとって有害なものとなる<sup>62)</sup>」。なんとすれば、「そのときには、民族的迫害の本格的な狂乱が待ちうけているだけなのだ。狂乱の規模については、チャールズ一世の王国が倒壊してのちのアイランドにおけるイギリス共和主義者たちの行状がよい見本になっている<sup>63)</sup>」。(h)

このような綱領の姿勢自体が、ロシアの革命運動とのかかわりで有害な冷淡さをポーランドにおいてひきおこすものだとするれば、社会民族主義的煽動は、ロシア革命にたいする一貫した露骨な非友好的態度を示す傾向をよりつよめることになろう。

最初の時期、すなわち、ロシアにおける革命運動が沈滞し、そのことが社会愛国主義者たちにロシアにおける社会的停滞の“理論”を創り出す口実を提供していた時期には、このような傾向をもつ文献は、いずれも、ロシアにおける革命的現象の欠如を熱心に叙述し強調している。この時期に、ロシアとトルコは、その後進性について、くりかえし比較された。たとえば、1893年の『プシェドシフィット』のメーデーについての報告のほかでは、全ヨーロッパおよびポーランドからの時事報道につづいて、次のように述べられている。

「ロシアとトルコ、これは、労働者の祭典に参加していない例外的な国である。これら二国は貧しさの点では他にひけをとらない。しかし、にもかかわらず、働く住民は、これまでのところ、自分のおかれている状況を理解することができず、自分の運命をじっと耐え忍ぶだけである。宗教的な偏見とツアーリやパシャにたいする心服が彼らを束縛し事実を直視することを妨げている。したがって、ロシアの工場に就業する数百万の労働者のうちのほんのひとにぎりほどが、1891年にやっとペテルブルグの一室に

集り、演説らしきものに耳を傾けたにすぎず、コンスタンチノーブルではこの程度のことさえも行われはしなかつた。<sup>64)</sup>」

しかし、よく知られているように、その直後の1896年に、ロシアの革命運動に急激な転換がはじまり、ペテルブルグのストライキ<sup>65)</sup>は、新たな覚醒およびそれにひきつづくロシアの革命勢力の興隆の合図となった。こうした現象は、社会民族主義の歴史にも転換をもたらすはずであり、しかも彼らにとっての試金石であることは明らかである。

民族主義的綱領の主たる基礎が、実際のところ、ロシアにおける本格的な革命闘争および政治的自由の獲得の可能性についての懐疑論に依っているとすれば、そしてまた、この綱領の根底にポーランドプロレタリアートの階級利益のみがあり、かくて、社会民族主義者たちが素朴なやりかたであるにせよ“もっとも民主主義的な憲法”を求めざるを得ないのだ、とすれば、90年代後半におけるロシアの革命運動の新たな高揚から、この綱領の全面的修正という帰結が当然なこととして導き出されることは明白であろう。1896年とその後数年間の出来事は、社会民族主義者たちの言うロシア社会の絶望的なまでの反動性という飽きもしない長談義にきわめて深刻かつ衝撃的な困惑をよびさまし、ロシアの歴史的停滞性という彼らの理論にたいする致命的な試薬となった。ロシアの労働者階級の覚醒によって、ポーランドプロレタリアートの“階級的利益”のためには、“より民主主義的な憲法”という天駆ける民族的ユートピアを追いもとめる必要がなくなり、逆に、ポーランドとロシアの革命勢力が共通の政治的自由をめざす闘いに成功を収めるべく手を結ばなければならなくなったことは、疑いをいれないところである。

しかし、ここで、“階級利益”や“より民主主義的な憲法”は決して原則などではなく、この綱領の実際の根拠づけ、すなわち、もっとも純粋な民族主義の、不器用な（お粗末な）遮蔽物にすぎないことが明らかにされたのである。そうなると、ドイツ社会民主主義における最新の日和見主義（ベルンシュタイン主義なのであるが）に極めて類似した何かが、ポーラ

ンド社会民族主義にもあらわれた、ということになる。この日和見主義は、90年代の末期、ドイツにおける産業の発展期に成立し、この時期の一時的現象をすべて“階級対立の緩和”やそれに類した見解についての意味ありげな総括として利用した。さらに、それは、危機が到来した今日、その明白な幻想を放棄するどころか、その危機と激しさを増した反動の出現を自分たちに都合よく説明し、実際には歪曲しようとしてつとめている。同様に、社会民族主義も、ロシア労働運動にたいする仮借のない弾圧ののちに、この事実によっても自己の誤った理論を放棄しようともせず、それどころか、誤った理論によって逆にこの事実を説明しようとしている。

1896年のペテルブルグの大ストライキののち、この考え方にたつ文献では、この出来事は一時的な現象にすぎないとされ、著者らは、もとのような平安と沈滞がロシアにまた戻るだろうことを期待して、ポーランドの民衆にこのロシアにおける出来事を知らせまいとつとめた。各国の社会主義新聞は、いずれも、この出来事を最大級のよろこびをもって報道したにもかかわらず、である。1901年3月の一連の事件<sup>66)</sup>が、ロシアにおける革命的高揚が鎮まる気配もなく、逆により高度な発展段階にすすんでこれを秘すことがおよそ不可能になったことを明白に証明したとき、遂に、社会民族主義者は、かくも不都合な現象にたいして一定の立場を採らざるを得なくなった。ペテルブルグの事件がポーランドの革命家集団やインテリゲンチアに与えた感銘はひととおりのものではなかった。それについて社会民族主義者はつぎのような反応を示した。

1901年の3月事件にかんして、『プシェドシフィット』には「幻想」という特徴的な題の論文が掲載されている。「絶対主義が譲歩しなければならないほど、ロシア社会の反対勢力は成長したのだろうか？近年、ロシア社会における立憲主義的潮流は、政府が憲法を与えなければならないほど、はたして成功を収めた、といえるのだろうか？ヨーロッパの新聞の論説や解説、さらには、ロシアの亡命社会主義者の代表たちの反響からみれば、まことに残念ながら、このような楽観主義はその依って立つ事実によって

裏付けられてはいないと考えられる<sup>67)</sup>」。ロシアの学生運動を検討し、ついで、さすがにタタールの羈絆に言及してはいないものの古くさい図式によって社会階層を分析したのちに、以下のような結論が提示される。「かくて、樂觀的独断論の色彩をもたないロシア国内の勢力配置が明らかになる。最近の学生の秩序紊乱は、労働者階級の意識がかなりの発展段階に到達していること、しかも、世間周知のロシア《社会》は、心中の憤りを抑えて臆病にうなづくこと以外は何も決定し得ないことを証明した。結局、この事件によって、我々は、全く動揺することもなければ、また、近い将来にロシア革命を期待する、という幻想を抱くはずもないのである。いまのところは、自分たちの勢力だけを信じよう。どんな助けにも頼らずに仕事をすすめよう。我々には、なお、おびただしい仕事があるのだから……」<sup>68)</sup>」。

社会民族主義者たちは、7年前、ロシアにおける革命運動が欠如し不可能であることを理由として、絶対主義打倒の闘いが自己の志向と根本的に合致しないと声明した。1901年の3月事件ののちにも、彼らは、何のためらいもなくこれと寸分違わぬ趣旨をくりかえしている。（さきに引用した1894年の『プシェドシフィット』掲載の「諸段階」と題する論文の抜萃を参照）。

「我々ポーランド人が、ツァーリに譲歩を余儀なくさせようとしてもしようがない。とはいえ、ツァーリがロシア全土に憲法を制定したときにはポーランドにこれを全然適用しないこともないであろう。そして、このことにより、ツァーリは、ロシアの自由主義によって批判されるよりもむしろ感謝されるかもしれない。《ポーランドの謀叛》——これは、役人どもと同じく、モスクワの自由主義者の愚痴の主題なのである。否、ロシア憲法をめざす闘いは、ロシアとの有機的連繫の支持者たち（ポーランド社会民主主義者を示唆する）にとってのみ意味をもち得る。独立をめざす闘いにおける階梯としては、それは、もっとも馬鹿げたことなのである」<sup>69)</sup>」。

のみならず、ロシアの革命運動が、ポーランドの分子をひきこむほどに

巨大な高まりを示すと、社会民族主義者は総力をあげてこの種の傾倒を阻止しはじめる。（この点にかんしては、次の例が、とりわけ際立っている）。〔j〕

〔k〕〈ポーランド社会党〉は、1848年に中断された社会主義協会の任務を、はっきりと意識的にひきつづきなし遂げることがをポーランドにおける古い民族主義的分派の精神に則して言明し……<sup>70)</sup>、実際に、社会民族主義者は「子供がどんな人にも無邪気にお父さんと言ってすがりつくように<sup>71)</sup>、彼ら自身が反民族主義的“プロレタリアート”，国際労働者協会，マルクス自身，およびリマノフスキ氏に由来するものであるかのようにみせかけようとして，それを度々言明してきた。事実，マルクスの40年代の見解を，全面的に，ポーランド再建のための拠りどころとしている社会民族主義とマルクス主義との関係は，マルクスがヴィリッヒ・シャペル派との<sup>1</sup>関係について用いたつぎのような表現に酷似している。すなわち，「彼らは，いまだかつて，自分自身の思想をもつという名誉を追求したことはない。彼らが自分の思想だと詐称しているものは，他人の思想についての思いちがいにすぎない。彼らはそれをたわ言に変え，しかも，それ自体を<sup>1</sup>剽窃する。」

社会民族主義者と反民族主義“プロレタリアート”との関係についていえば，彼らは，もとの〈プロレタリアート〉党の亡命者が『プシェドシフィット』とともに民族主義に転じたという理由で，これを，自分たちの先達とみなしているのである。これらふたつの組織のあいだには，たとえば，プロシアの大蔵省と〈ドイツ共産主義者同盟<sup>72)</sup>〉とのあいだに存し得るようなかかわりがあるだけである。この両者は，プロシアの大蔵大臣だった故ミクヴェル氏<sup>73)</sup>が，若いころは共産主義のはなばなしい煽動家だったという理由でつながりがあるのである。

周知のように，1901年の学生運動は，ロシア全土にわたる政治的特質を示してはいたが，ポーランドの青年たちのあいだには，いささかも反応をよばなかった。ただし，ワルシャワで無為に生活していたロシア人学生



と、政治的によりめざめたポーランド人学生は、ポーランド人の教授が就任していた四つの講座にみられるように、かりにそれがささやかなものであるにせよ、地方的要因を反体制的な精神のあらわれとすべく、死物狂いに努力していた。ところが、ポーランド人学生のどんな恥ずべき行為にも決して動揺しなかった社会民族主義の新聞は、すべての出来事について、ただ非難するのを当然のこととした。すなわち、少数の学生がワルシャワで学生の示威運動をはじめようとしているにすぎない、と。

『プシェドシフィット』の1901年3月号はつぎのように述べている。「我が国の青年は、直接、自分たち自身で反体制運動を展開してきた。その運動はポーランドの独立をめざすもので、ロシアのそれよりも古く、かつ、蓄積も多い。それは、農奴の一部解放を記念して自由主義的なツァーリの“顕彰”のためにはじめられたロシアの示威行進の最後尾につきしたがってのろのろと歩くことではなく、何よりもまず自分の力をポーランド独立運動の強化のためにむけるべく期待されてもいるし、また、義務づけられてもいるものなのである<sup>74)</sup>」。そして以下のようにつづく。「我々は、現行の大学規程の履行を要求するためには役立つにしても、全般的な無関心さという状況の下で人為的な突破口をつくらうとしている（ワルシャワでの）今日の“示威運動参加者”グループの無邪気で無遠慮な行為を賞めるわけにはゆかない<sup>75)</sup>」。

こうして、ロシアにおける本格的な革命運動が終熄すると、社会民族主義は、ロシアとポーランドの運動の融合に敵対するスローガンを明白にうち出した。このスローガンに則って、社会民族主義的新闻は、ロシアの運動の欠点をあげつらい誇張し、その本質的な力や意義を過少評価し、その弱味をことごとくみつけ出し強調して、ポーランド人民にたいして、終始一貫、これを貶しめようとしている。たとえば、このような新聞は、どんな場合でもロシアの革命運動の細分化状態や闘う集団および出版グループの数の多さ雑多さを前面に出して、運動を統一しようとする傾向について極めて懐疑的な態度をとり、ズバトフ系の労働者の影響や成功を過大評価<sup>76)</sup>

する。そして結局のところ、ロシアの革命的グループを排外主義・大ロシア主義等々におちいつていると非難することによって、これとの敵対的關係を確立しようとする。この点にかんして、きわめて特徴的なことは、ユダヤ系〈ブント<sup>77)</sup>〉にたいする中傷的な攻撃である。

このように、社会民族主義者は、一方でポーランドの社会主義運動をロシアの運動から萬里の長城によって分断し、専制打倒をめざす闘いを妨害しようとする努力ながら、同時に、現実には、ポーランドでは政治的闘争を全く展開していないのである。

実際に、このような傾向の人々は、ポーランド労働者階級についてのロシア政府からの譲歩の可能性を否定し、また、民族独立にむけての彼らの志向の上で極く近い将来においてさえこのような譲歩の意義を否定するのであるから、したがって、今日存在する政治的諸条件に立脚した日常的階級闘争は、彼らにとっては、事実上無に等しいのである。〈ポーランド社会党〉の綱領の簡明な定式化に従えば、彼らの最小限綱領（これには労働立法の要求も含まれている）は、およそ、ポーランドがその一部を構成している現存の国家にかかわるものではなくて、将来の独立ポーランド共和国、すなわち、政治綱領の緊急かつ基本的項目となっているこの共和国にかかわるものなのである。社会民族主義者は、現在のロシア政府にたいしては、ポーランドからできるだけ速かに退去すること以外には何ひとつ要求を出さないのである。

一方では、たしかに、ポーランドの再建は民族の独立という事実からみると社会主義の窮極的な理想の完全な具体化であり現実化である。しかし、他方、綱領の規定全体からみると、日常の階級的・政治的闘争は、ポーランドの再建ののちにおいてのみ、実際にはじめられ、また、そうでなければならぬということになる。

今日における社会民族主義者の政治的活動は、ポーランドにおける武装蜂起という絵空事の準備に尽きる。すなわち、簡単に言えば、“人民戦争”，“人民軍”，“臨時政府”およびこれに類した他愛ない思いつきに

ついでに深刻ぶった子供っぽい議論に尽きるのである。

たとえば、1901年までの10年間に、この党は、どんなかたちであるにせよ、ポーランドにおける自己の活動のかがやかしい結実としての真の意味における民族的示威行動を、文字どおりひとつとして成し遂げることができなかつた。この党によって、信じ難いほどの騒音が発せられ、しかも「3万人以上の飛脚」<sup>78)</sup>が党の功績についての報告をふんだんに運んでいるにもかかわらず、である。それなのにこの党は『プシェドシフィット』で、「人民を蜂起させるときは今到来したのか否か？」についての検討をはじめたのである。この問題との関連で、将来の蜂起のためのきわめて綿密な軍事行動の計画が練られている。「我々はポーランドの人民革命では最低限50万人の兵士を集めることができるし、また、集めなければならない、と考える。緒戦における成功ののち、兵力は100万人に増えるであろうし、また、増やさなければならない。なぜなら、その革命において最低限の兵力も揃わなければ人民戦争などおこらないだろうから、である」<sup>79)</sup>。このような驚嘆すべき論証につづいて、つぎのような、クツゾフやスペランスキにも匹敵するような動員計画が述べられている。「50万のポーランド革命軍は、ポーランドに配置されているロシア軍を要塞に閉じこもらざるを得なくさせ、その一部を撃破し、封じ込めることができるばかりでなく、リトワニアにも直ちに革命を波及させ、ある程度まで小ロシアにもこれを及ぼすことができる。地理的状況、および、ポーランドのすぐれた交通網によって、わが革命軍は、小ロシアやリトワニアにおいて、ロシア軍の動員よりもはるかに敏速に進軍をなし遂げ得る。もっとも、ロシア軍の鈍重さや拙劣さは周知のことなのだが」<sup>80)</sup>。残るのは装備の問題だけである。『プシェドシフィット』出身の指令官たちは、この実務的細部にも言及する。「我々は、いったいどこから100万もの小銃や大砲を運ぶか？この忌々しい大砲という奴は、ポーランド人にいつも悪霊のようにつきまとっている。しかし、昔、ポーランドの農民は大鎌で大砲を手に入れたのだし、そればかりでなく、昔、鎌にたいして大砲がもっていた危険度に比べ

れば、今日の大砲が小銃にたいして持っている危険度は、はるかに小さいのである。ギリシャ・トルコ戦争および最近の南アフリカ戦争では、せいぜい全死傷者の0.5%ほどが大砲によって犠牲になったにすぎない。大砲は縦隊にとっては脅威であるが、散兵線では最少限の損失をこうむらせるだけである。<sup>81)</sup>」結局、「我々のもとに」大砲がないことを誰も嘆きはしない。問題は、すべて、金銭にある。「数千ルーブリかけて、パンフレットは郵送される。数千万ルーブリかけて、小銃や大砲を運ぶのは難かしいことではない。武器の密輸はヨーロッパ各地やその他の地域でも昔から繁昌している。そうだ、身の程をわきまさえすればよいのだ」<sup>82)</sup>。

肝心なのは以下の点である。すなわち、社会民族主義者は、その民族的綱領の基盤を求めている社会的諸力や客観的趨勢について論述することができなくなればなるほど、将来の見込みを検討しながら、すべてのユートピア主義者と同じく、否応なしに、自己の理想の実現について純然たる外面的細部にますます入り込まざるを得なくなる、ということである。それは、ちょうど、居酒屋政談家が、宙に浮いた状態で、あてにならない資料をふりかざすのとよく似ている。しかし、たとえこのような思弁がユーモア作品としての観点だけからは注目をあつめるとしても、それは、きわめて重大な、もっと言えば、惨めな現象である。それは、政治的無気力さ、より正確には、政治的不真面目さの遮蔽物になっているのである。

上で引用したような、「散兵線」、縦隊、密輸で運びこまれた大砲などについてよく響く低音で語られた挑戦的なおしゃべりは、残念ながら、専制にとっては全く無害なものの典型的な見本となっており、いや、むしろ、ポーランドの知識人にとっては有害なものとなっているのである。それは、兵士のあいだで墮落した革命遊びをいっそう蔓延させるものであって、社会民族主義の武装した革命闘争は、結局のところ、そこにゆきつくのである。ポーランドの革命運動を、一貫して、ロシアのそれから分断しようとしていることと併せて、この政治的無気力さは、うたがいもなく、社会民族主義をして、副次的に、ポーランドにおける専制の支柱たらしめ

ているのである。

ドイツ。

ヨーロッパにおける修正<sup>83)</sup>

<原註・編者註>

34) ここに述べられている<ポーランド人民>協会の綱領的宣言とそれにたいするルドヴィク・ヴァリンスキの批判的評価は「≪社会協会“ポーランド人民”の宣言≫のゆえに」(『プシェドシフィット』1881年10月1日, 3~4号, S. 2~3, 12月1日, 6~7号, S. 1~3, 1882年1月, 8号, S. 1~2, 複製は『ポーランド・マルクス主義者の第一世代』——以下『第一世代』と略記——第1巻, S. 545~551, 第2巻, S. 758~761)を参照。

1881年10月2日のクール(スイス)における社会主義者たちの国際会議でのリマノフスキの立場については『プシェドシフィット』(1881年10月25日, 5号, S. 1~3, 12月1日, 6~7号, S. 4~6)の雑報記事を参照(部分的複製は『第一世代』第1巻, S. 535—544)また, B.リマノフスキ『回想(1870—1907)』(ワルシャワ, 1958年) S. 267—272をも参照。

35) おそらくは, パリの民族的社会主義の学生グループのことを指しているであろう。しかし, この場合, パリ在住のポーランド知識人たちの急進的民主主義的なこの組織が活動を開始したのは, 1887年ではなく, 1888年の年末であったのに, 著書はその年を間違えている。また彼らの雑誌『めざめ』(Pobudka)は1889年1月に発刊された。

36) 『めざめ』(Pobudka)——ポーランド民族社会党の機関誌。1889—1893年の間, 月刊誌としてパリで発行。全部で12号出る。編集者はスタニスワフ・バランスキとヤン・ロレントヴィチ。ボレスワフ・リマノフスキも協力した。

37) 「ツァーリと労働者」(『ロボトニーク』1894年2月, S. 4—ロンドンのPPS発行の特別リーフレット)。

38) 同前, S. 5。

39) 同前。

40) 同前。

41) 1902年のSPDミュンヘン党大会についてのK.カウツキーの論文及びこの大会でポーランド問題について述べたカウツキーの特別発言について触れた『プシェドシフィット』(1902年10月, 10号, S. 385—386)の記事を指す。その際にカウツキーは, ポーランド独立のスローガンの擁護者として発言したが, しかし,

ただ言えることは「ポーランド民族国家の建設」であって、「古い歴史的ポーランドの再建」ではない、と指摘した。このことについて『プシェドシフィット』は次のように解説した——「われわれが関心を持つべきなのは“ポーランド民族国家の建設”であって、“古い歴史的ポーランドの再建”であってはならない、というこの指摘は、われわれにとっては、まったく余計なもののように思われる。もしわれわれが“歴史的”ポーランドの再建を望むのであれば、われわれはシロンスク（シレジェン）—プロイセン領及びオーストリア領—も、またプロイセン領のマゾフシェをもわが領土なりと言うことはなかったであろう——同様にわれわれはウクライナの独立要求を支持したり、リトヴァとの自発的連邦の原則に立っての結合を要求することもなかったことであろう」

- 42) P P Sによって無署名で発行されたエドワルト・アブラモフスキのパンフレット「ポーランド社会主義者のメーデーにあたってポーランドのすべての労働者、鋳夫たちに」（1893年、30ページ、複製は E. Abramowski; *Pisma publicystyczne w sprawach robotniczych i chtopskich*（労働者・農民問題論集—以下『論集』と略記—）、ワルシャワ、1938年、S.190—215）指す。
- 43) 同前、『論集』S.213—214。
- 44) 無署名のパンフレット「労働者の公の祭典、メーデー」（P P S 出版局発行、16ページ）を指す。
- 45) ワルシャヴィアク〔E.アブラモフスキ〕「社会主義者は何を望むか」（1896年、ロンドン、ZZSP 出版局）、S.13、複製はアブラモフスキ『論集』S.216—236
- 46) 同前、S.22—23、『論集』S.235—236。
- 47) 「コレラ」（『プシェドシフィット』1894年4月、6号、S.12。
- 48) 同前。
- 49) 「読者へ」（『人民新聞』*Gazeta Ludowa*、1902年1号S.1）。
- 50) 同前、S.3。
- 51) 『プシェドシフィット』1894年12月、12号、S.16。
- 52) ミハイル・N・カトコフ（1818—1887）——ロシアの著名ジャーナリスト、『モスクワ・ヴェドモスチ』の編集者。1863年のポーランド1月蜂起に際して反動化し、極端に排外主義的な立場に移って、反ポーランドの指導者の一人となった。
- 53) パヴォロキー、A.クルシェヴァン（1860—1909）——ロシアの極右の代表的人物。黒百人組の新聞『ベッサラビア』と反ユダヤ主義の雑誌『ドルーク』の発行者、キシネフのポグロムの組織者の一人。
- 54) ルートヴィヒ・ベルネ（1786—1837）——ドイツの革命的民主主義の作家、ジャーナリスト、批評家。彼の主著の一つに論争的パンフレット『フランス人嫌いのメンツエル』（1837）があり、その中でベルネは急進民主主義的愛国主義の立

場から、当時の著名な文芸批評家にして文学史家のヴォルフガング・メンツエル（1798—1873）に代表された反動的民族主義者に反対した。ローザ・ルクセンブルクはベルネの著作を高く評価していた（ロベルト・ザイデル宛1898年6月23日の書簡『ス・ポラ・ヴァルキ』1959年1号，S.69所版—を参照）。

55) ヘルマンの指揮のもとにゲルマン民族がローマの軍団と9世紀にトイトブルクの森で行なった戦いで、ローマ軍はこの戦いで壊滅的な敗北をした。この戦いはタキトゥスによって描かれている。

56) ハインリヒ・ハイネの作品『ドイツ冬物語』（1884）第11章から——

これはタキトゥスが描いた  
トイトブルクの森だ  
これはヴェルスがかくれていた  
古典的な沼地だ

ここでヘルスケルの王，あのヘルマン  
あの高貴な英雄が奴を打ちのめしたのだ  
ドイツ民族が  
このぬかるみの中で勝ったのだ

もしもヘルマンがこの戦いに  
その金髪の遊牧の民とともに勝利していなければ  
ドイツの自由はどこにもなく  
われわれはローマ化されていたことだろう！

57) トイトブルクの森での戦いは大ゲルマンの歴史的伝説の竿頭を飾るものであってしばしばドイツの民族主義的歴史家たちによって追憶されるが、ドイツ文学と社会思想の急進民主主義派の代表者たち、とりわけハインリヒ・ハイネは、それに対して批判的な態度をとった。

58) 註54を参照。

59) 南ドイツは当時はSPDの修正主義的な右派の強い影響下にあった。この派の代表的な人物は、ゲオルク・フォン・フォルマル、ルートヴィヒ・フランク、ヴィルヘルム・コルプなどであった。このパンフレットが書かれる直前の時期に開かれたSPD大会（1900年—マインツ，1901年—リュベック，1902年—ミュンヘン）では、当時のSPD多数派とこの派との間で激しい論争が行なわれた。

60) ヴォイツェフ・コルファント（1873—1934）と1901年以降かれが発行した『グルノシロンスク』（高地シレジア）の周辺に集まった政治運動を指す。

61) [W.ヤトコ=ナルキェヴィチ]「諸段階」（『プシエドシフィット』1894年10月，11号，S.2）

62) 同前, S. 3。

63) 同前, S. 3～4。

h) 草稿の頁では 105 頁が一枚だけ欠けている。ての欠落が著者自身の間違いであることは疑いが無い。

64) 「外国のメーデー」(『プシェドシフィット』1893年4月4号, S. 13)

65) 1896年6月にペテルブルクの26の綿業工場で労働時間の10時間半への短縮と賃上げのスローガンの下に行なわれたストライキを指す。ストライキ後に政府は約1000人の積極的なストライキ参加者をペテルブルクから追放した。ペテルブルクの決起は西ヨーロッパの労働者の間に広汎な反響をよんだ。(L.M.イワノヴァ編『19世紀ロシアにおける労働運動, 文献資料集』第4巻, 1895—1897, モスクワ, 1961年, S. XXII—XXV, 218—310)

i) 著者は欄外に次のように付記している。——「ペテルブルクの事件の報告が現われたとき」

66) 1901年2月と3月に、ペテルブルク、モスクワ、キエフ、ハリコフ、カザン、トムスクで労働者と学生の嵐のようなデモンストレーションが行なわれた。これはロシアの労働運動が新たに起こり、高まり、経済的ストライキから政治ストライキとデモンストレーションへと移りつつあることを示すものであった。(『ソ同盟共産党史』第1巻, ワルシャワ, 1968年, S. 436)

67) [レオン・ワシレフスキ]「幻想」(『プシェドシフィット』1961年5月, 5号, S. 162)

68) 同前, S. 163。

69) マズール [スタニスワフ・グラプスキ]「刻下の重要問題」(『プシェドシフィット』1901年3月, 3号, S. 88)

j) ここにはその例が欠落しているが、おそらく著者はここに適当な引用を書き加えるつもりだったのであろう。

k) 明らかにテキストの一部が欠落している。

70) マズール [st. グラプスキ] (『プシェドシフィット』1901年5月, 5号, S. 170)

71) ニコライ・ネクラソフの詩「みすぼらしい者と着飾った者」(1857年)から。原文は次の通り。

部隊のみんなが驚いた  
(嘘じゃないんだ, ほんとだよ)  
“お父さん”と誰にでも  
その子が無邪気にすぎるので……



- 1-1) カール・マルクス「ケルン共産党裁判の真相」（マルクス＝エンゲルス全集第8巻）からの引用。1850年の共産主義者同盟の反マルクス分派の指導者はアウグスト・ヴィリヒ（1810—1878）とカール・シャツパー（1812—1870）を指す。
- 72) 共産主義者同盟——カール・マルクスとフリードリヒ・エンゲルスのイニシアティブの下に1847年にロンドンで設立されたドイツ社会主義労働者の組織。同盟から委嘱されたマルクスとエンゲルスは「共産党宣言」を起草した。組織は1852年まで存続し、ドイツ及び国際的な革命的労働運動の発展の初期に大きな役割を演じた。
- 73) ヨハネス・ミクヴェル（1828—1901）——ドイツの政治家で1890—1901年の間はプロイセンの大蔵大臣。学生時代にドイツ共産主義者同盟で活躍した。
- 74) K-icz 「国から、そして国について」（『プシェドシフィット』1901年3月，3号，S.113）
- 75) 同前，S.114，
- 76) ズバトフ系の労働者——別名警察社会主義とも呼ばれ，1901—1903年の間，オフラーナと呼ばれたツァーリ政治警察の指導の下に活動した合法的労働者組織を設立したロシアの憲兵隊長セルゲイ・ズバトフ（1864—1917）の名前からこのように呼ばれた。
- 77) ローザはここに『プシェドシフィット』1901年9月号からの次のような引用を註として付けている。——「今日——認めねばならぬことは——リトヴァで最強の組織がユダヤ人の〈ブント〉であり，そのためにユダヤ人プロレタリアートの間に国（ポーランド——訳者）の政治的利益に反するロシア化および中央集権的＝汎ロシア主義的な見解が支配していることだ。（中略）ユダヤ人プロレタリアートは，目下ムラヴィエフの後継者たちの魂によって墮落し，知識人たちは経済的な観点ではマルクスに，しかし政治的な観点ではイロヴァイスキーによって育てられている。」——苦言子〔レオン・ワシレフスキ〕「同志マズールの論文に寄せて」（『プシェドシフィット』1901年9月，9号，S.329）
- ♀ ミハイル・ムラヴィエフ（1794—1866）——別名ヴェジャチェレム。とりわけ1863—1865年の間リトヴァの知事として仮借のないロシア化政策をすすめ，ポーランド民族蜂起参加にたいして血の弾圧を加えたことで有名。
- ♀♀ ドミトリー・イロヴァイスキー（1832—1920）——ロシアの歴史家，“正規の”学校教科書の著者で，ロシアのツァーリの政策を美化し，とくにポーランドの没落と分割の原因は，侵略者たちの政策ではなく，ポーランド人の民族的性格と彼らのアナキーへの傾向にあるとした。
- 78) ゴーゴリの喜劇『検察官』の主人公フレスタコーフの言葉をもじったもの。
- 79) マズール〔st. グラプスキ〕の論説（『プシェドシフィット』1901年3月，3号，S.91）

80) 同前。

81) 同前。

82) 同前。

83) 著者は明らかにここに記されている彼女の仕事の計画の二点について、このパンフレットの問題意識と、西ヨーロッパの修正主義とPPSのイデオロギー的關係という観点から、ドイツ労働運動が直面する問題を引続いて論じるつもりであった。